

非母語話者俳優の台詞の音声に対する母語話者の 評価と日本語音声教育

羽澤志穂

学習者を支援するための日本語教育には、学習者が何を課題としているのか学習者の文脈の中で捉え、日本語教育という視点からどのような支援が行えるのかを考えることが必要であると考えます。この認識の下、本稿では非母語話者俳優を支援するための日本語音声教育について考察を行った。

1. はじめに

現在、在留外国人は日本社会を構成する主体の1つになっており、日本語教育が果たす役割に期待が持たれている。学習者の多様性が指摘されて久しい中、近年、学習者の複雑な背景も考慮した日本語教育が求められるようになり、社会文化的要因も含めた学習環境に注目が集まってきている。

在留外国人の中には俳優として日本語で芝居を行う非母語話者俳優も存在する。このような非母語話者俳優が舞台活動を行うにあたり必要となる日本語能力とは何であろうか。また、非母語話者俳優を支援するためにはどのような日本語教育を行えばよいのだろうか。

以上を踏まえ、非母語話者俳優に対する日本語音声教育には、演劇界において非母語話者俳優が置かれている環境の把握、要求される音声能力を把握し、現状の課題や教育のあり方を探る必要があると考えた。そこで、本研究の目的を、1) 非母語話者俳優を取り巻く周囲の人々のニーズを明らかにする、2) 母語話者は非母語話者俳優の台詞の音声の何に注目して評価するのか、許容しにくい要素は何かを明らかにする、3) 現状を踏まえ、俳優を対象とした日本語教育のあり方や教育展開の可能性、教師の役割を探ることとした。

2. 非母語話者俳優の文脈

演劇は観られることを前提とした表現形式であり、俳優という職業は演劇制作者や観客等の様々な要求に応えられるということを示せなければ成り立たない。つまり、他者から評価されることが必然となる職業だと言える。俳優を評価するのは演出家、プロデューサー、観客、劇評家など様々であるが、その多くは母語話者である。非母語話者俳優の文脈を捉えるためには、彼らを取り巻く母語話者が非母語話者俳優をどう捉え、何を求めているのかという母語話者評価の視点が有効であると思われる。

しかし、この視点には多数派集団の規範の押し付けや同化を強いるという批判の声がある。一方、日本社会の中でうまくやっていくためには多数派集団である日本語母語話者に高い評価を受けたほうがよいとする考えも存在する。学習者自身も関係者もこのジレンマに陥っている。そこで、このジレンマを乗り越えるために、学習とは与えられた知識をただ吸収することではなく、主体が共同体の中で自己実現を図り、自らの存在意義を作っていく過程の中で行われる営みであると考えた。このように捉えることで、日本語学習は日本社会においての自己実現に必要な一つの通過点であり、学習そのものが目的ではないと考えられるようになる。本研究においてもこの立場を取りたいと思う。

非母語話者俳優が日本で俳優として活動するためには、母語話者の評価を受けなければならないということを前提に、非母語話者俳優を取り巻く母語話者が非母語話者俳優に何を求めているのかを明らかにすることで、非母語話者俳優の文脈の一斑を明らかにしたい。

一般に演劇は総合芸術であるとされ、戯曲、俳優の身体や演技、演出、舞台装置や衣装、照明や音響、観客、劇場、それを取り巻く社会など様々な要素で構成されている。本研究ではその中から俳優の音声に焦点を当て、演劇における音声の重要性を示し、非母語話者俳優に必要な日本語音声能力とはどのようなものかを探る。

3. 非母語話者俳優を取り巻く人々のニーズ

非母語話者俳優を支援するためには、その非母語話者俳優が属している共同体やかかわりのある人々、そこで非母語話者俳優が果たすべき役割などを全体的に捉えなければならないと考える。そこで、母語話者は非母語話者俳優の台詞の音声はどう考え、何を求めるのかを明らかにするため、ニーズ調査を行った。

調査は10名の母語話者に対し個別にインタビュー形式で行い、「非母語話者が話す日本語についての普段の態度や意識」「非母語話者俳優の台詞の音声についてどう思うか」につ

いて自由に語ってもらった。得られたデータはその内容により「非母語話者の音声一般に対する普段の意識」「演劇を観るときの態度やニーズ」「演劇作品を制作するときの態度やニーズ」に分類した。今回の調査目的は非母語話者俳優を取り巻く人々のニーズにはどのようなものがあるかを明らかにすることである。よって、評価者の属性に沿った分析は行っていない。

今回の調査からは、普段は非母語話者の音声に寛容である評価者も非母語話者俳優の台詞の音声には厳しい評価を行うことが示された。演劇の制作者や観客は、立場は異なっても芝居には同じものを求めている。すなわち、台詞には「外国語訛りのある音声」は受け入れられず、非母語話者俳優には「母語話者と同じ音声」を求めている。それは、芝居の目的が表現を伝える（表現が伝わる）ことにあり、そのためには観客のイメージを喚起しなければならない。しかし、外国語訛りがある音声ではその妨げになってしまう。非母語話者俳優は学習者である前に俳優であるとみなされる。日本語音声能力は俳優としての条件の一つであり、評価者には「母語話者と同じ音声」は「できて当たり前」という前提がある。

4. 台詞の音声に対する母語話者の評価

第3章のニーズ調査で非母語話者俳優を取り巻く人々は非母語話者俳優の台詞の音声に「日本人と同じ音声」であることを要求することがわかった。では、その「日本人と同じ音声」とはどのような音声を指すのだろうか。第4章では母語話者が非母語話者俳優の台詞の音声を具体的にどのように評価するのか、注目する要素と許容しにくい要素を明らかにするため、評価調査を行った。

「評価調査」は「ニーズ調査」と同時に行われ、評価者は前述と同じ母語話者10名である。評価対象となる音声は中国語母語話者俳優のものである。今回の調査ではあえて評価対象を音声に絞り、他の要因の影響を防ぐため評価対象音声提供者1名による台詞の音声を扱った。録音した音声を評価者に聞かせ、印象も含めどのように思ったか自由に語ってもらった。その内容から得た評価項目を「言語的マイナス要素」「言語的プラス要素」「表現的マイナス要素」「表現的プラス要素」に分類し、考察を行った。さらに、許容できない要素についてもその順番に挙げてもらった。

母語話者が非母語話者俳優の台詞の音声を評価する際は、言語的要素を基盤とし、その言語的要素は「できて当たり前」という前提が根底にある。評価者が表現面をマイナスに

評価する場合は、原因を非母語話者であるためとせず、俳優としての想像力や表現力に結びつけてしまう傾向にあった。これらの結果を日本語教育へ還元することを考えたとき、言語的要素の「誤りの重さ」という視点が有益になると思われる。しかし、非母語話者俳優の台詞の音声の評価対象になると、外国語訛りの度合いではなく、その有無が問題になる。誤りに重さをつけるなら、気づく者は気づくといった微妙な差異のレベルでの情報が必要になるだろう。母語話者俳優が求める「母語話者と同じ音声」とは、評価者それぞれが持つ日本語の音声に対するイメージのことであり、絶対的な規範があるわけではない。しかし、日本語教育では演出家の要求に応えるため、「少数でも気になる人がいる」なら指導するという立場をとる必要があるだろう。非母語話者俳優は厳しい評価を受けることになる。日本語教育もこのことを踏まえた上で、実践の場に臨む必要があると考える。

5. 非母語話者俳優に対する日本語音声教育

第5章では「ニーズ調査」「評価調査」から明らかになった非母語話者俳優が置かれている環境や求められる能力を踏まえた上で、学習者を支援するためにはどのような教育実践を行えばよいのか考察した。

非母語話者俳優の日本語学習は多くの人々によって支えられている。非母語話者俳優の人的学習資源には、主に演出家や母語話者俳優といった演劇専門家と日本語教師が挙げられる。それぞれの役割を考え効果的に非母語話者を支えるため、非母語話者俳優から得たコメント、教育実践の場における演劇関係者と非母語話者俳優の様子、非母語話者俳優への聞き取り、筆者の内省を通して両者の指導の特徴を示した。

その結果から言えることは、演劇関係者は自らの経験や思い描く具体的なイメージに従ってアドバイスができるが、説明が感覚的であり経験した者以外には伝わりにくい。一方、日本語教師は第二言語習得研究の知見を用いた分析が可能であり、非母語話者であることを考慮した指導ができる。しかし、そのジャンルで求められる音声に対する知識や生成能力がないことから、一般的な日本語についての説明になってしまう。両者の指導の特徴を活かすために日本語教師の役割として、学習者が生きている環境を巨視的な視点で分析し教育を計画することが挙げられる。そのために教師には学習者が属する分野の専門家と意見交換や調整、協働を行うコミュニケーション能力が必要とされるだろう。

以上を踏まえ、教育実践の場を振り返り、課題と今後の教育展開の可能性を述べる。まずは第1に、初期の段階から自律学習を促すような計画と実践の必要性を確認した。自律

学習にはモニター能力の育成も必要であるが、音声的逸脱に気づくためには教師のフィードバックが効果的に働く。しかし、何を持って逸脱とするかは評価者それぞれにより異なるため難しい。日本語教師は評価者が自分の感覚に従って述べたものを、客観的にどのような現象を指しているのか分析し、学習者にわかりやすく伝えなければならない。それには、演劇関係者と同等な精度の弁別・同定能力が求められる。

第2に、明示的な指導の必要性を挙げる。先行研究からもその有効性は支持されているが、演劇関係者の指導の特徴として、すべての指導者が言語形式に焦点を当てているわけではないことが言える。または、明示的であるが説明が感覚的になる傾向が強い。よって、日本語教師がこの点を補うことで非母語話者俳優にとって有効な指導となり得ると考えられる。

第3に、指導内容とそのタイミングについてであるが、言語形式に焦点を当てた指導と繰り返しの反復練習はタイミングが重要になる。その時点での学習者のレベルや練習量、練習スタイルを見極められたとき、音声学的知識に基づいたアドバイスが活きると考える。

第4に、体系的な指導について述べる。個々のケースに即した表現は台本の中の具体的な文脈に合わせ演劇関係者と練習を行うことができる。日本語教育では非母語話者俳優の全体的な音声的特徴を分析し、フィードバックをする。そうすることで、非母語話者俳優は具体的事例で生成した個々の音声現象と自分の音声的特徴を関連付けやすくなる。さらに、ある程度一般化された型を示すことで非母語話者俳優の中に音声的規範を作り、様々な固有のケースに対応するための基礎を築くことが可能になると考えられる。

第5に、非母語話者俳優の情意面のケアについて触れる。俳優は練習や稽古の過程において教育的配慮よりも結果を出すことを求められる場合があり、非母語話者俳優はストレスを抱えやすい。日本語教師は、やみくもに練習量をこなしてもうまくいかないとき、その原因と対処法を伝える、あるいは一緒に考えるという存在になり得る。劣等感や無力感を与えることも軽減させることもできるということを常に意識するべきだと考える。

6. まとめと課題

今回評価対象となった非母語話者俳優は「日本語学習者」である前に、一人の「俳優」として自らが所属する共同体の中で日々生活を営んでいた。日本語学習は共同体の成員として周囲との関係付けを行いながら自己実現を図る過程で行われている。日本語教育はこの環境から非母語話者俳優を取り出してはならない。この環境の中で、

利用できる資源を活用することが大前提であり、巨視的・多角的な視点を持ち教育を実践しなければ、非母語話者俳優の助けとなる支援は難しくなることが示された。これが実現できたとき、日本語教育は非母語話者俳優の自己実現に対し、大きな役割を果たし得ると期待できる。

今後の課題として、演劇関係者側や非母語話者俳優の視点からも考察を行い、また、方言の特徴が現れた台詞の音声と比較することで、本研究で示された日本語教師に求められる能力が実証され、より具現化されたいと考える。